

子育ての社会化を図るための“保育 ICT”の活用（延長）

代表研究者	上 村 裕 樹	東北福祉大学教育学部 准教授
共同研究者	音 山 若 穂	群馬大学大学院教育学研究科 教授
共同研究者	井 上 孝 之	岩手県立大学社会福祉学部 准教授

1 はじめに

保育施設における ICT の活用は、保育の報告や共有、振り返りが進められて、園全体の保育者間での情報共有が可能となり、公開されている同僚の保育活動をモデルとして、自身の保育活動に取り入れていくことや自主的なカンファレンスや協同的な学び合いが起こることが、これまで確認されてきた。筆者らは、貴財団からの研究調査助成を受けシステムを開発し、複数の保育施設を対象として研究を進める中で、保育施設における ICT の活用は、保育者の主体的な学びや取り組みの姿を生み出していくことにも繋がり、保育力や保育の質の向上に繋がることが確認でき、一連の報告を重ねてきた（上村ら, 2020; 2021; 2022; 2023）。

保育の質の向上には、自らの保育実践を振り返り、検証し、省察を重ね、試行錯誤を繰り返しながら、保育実践の課題解決へと取り組むことが必要不可欠である。保育内容および保育実践を可視化することが保育を振り返り検証するうえで重要（岩田ら, 2018）であり、保育内容の可視化は、保育を充実させ、保育者の学び合いによる同僚性や専門性の育成、保護者への理解推進や子育て支援等にも有効である。研修の効率化やビデオ、写真の活用や話し合いの可視化は、ICT との親和性が高く、保育者が自身の保育を振り返り、保育に関する検証に取り組み、子どもの日々の活動や姿を改めて捉え直し、自らの保育の改善に向けて働きかけるきっかけにも保育 ICT のシステムが役割を担っている（上村ら, 2022; 2023）。

また保育 ICT は、可視化された保育実践を家庭や社会へと繋いでいくことへの課題を解決していく上で有効であることが示されている（上村ら, 2023）。これまで保育施設では、子どもの発達を家庭と連携して適切に支えるために家庭との緊密な協力の体制を築くことや、学校や学童保育施設など保育の質の向上を目指した際に接続を必要とする社会資源と協同することなどを目指してきているが、これらは解決や解消が難しい課題の一つであった。これは、連携や協同を進めていくための土台は存在しているが、双方の多忙な状況に伴う情報共有の実際的な不足や関係構築のコンテクストの不足、状況や背景に対する理解と認識の不足などが課題として存在していたためである。しかし、こうした課題の解決において、双方向性が確保され、視覚化が図られ、時間的制約にも縛られにくい保育 ICT は強力なツールになりうる。

保育者は、スマートフォンやタブレット、デジタルカメラによって撮影した画像や動画を保育記録システムに投稿する。投稿は保育 ICT を活用し、子どもの保護者に対して限定的に公開・共有される。これにより、施設における子どもの生活や育ち、遊びの様子が保護者に視覚的に認識され、そこに示された保育者のコメントを通し、一人一人の子どもに向けられた保育のねらいや内容について共有が図られる。さらに、保護者とのやり取りが積み重ねられ、家庭との協同は促進される。そしてそのシステムを介して、保育現場の子どもの日常と生活の姿が、学校や学童保育施設等と繋がっていくことは、子育ての社会化を図ることそのものであり、地域社会において子どもの姿や生活をステークホルダーと共有していくことの意味は大きい。

保育施設における全ての保育者が、組織と個人の自己変革に向けて、能動的かつ自律的に保育力の向上や保育の質の向上に取り組むことが重要であるため、保育施設では、園内での研修やカンファレンスなど、相互に学び合う機会は設けているとともに、職場内での学び合いの方法として、同僚保育者の協同省察やスーパーバイズの機会を設けるようになってきている。しかし、現実的に課題の解決を図ろうとした際、特に適応課題については、園内の資源のみで主体的かつ自律的に取り組むことは難しい場合も多い。現在、保育施設の利用におけるニーズの多様化や保育サービス充実への期待に伴う複雑化により、保育者が業務に対しての何らかの負担感や解決できない閉塞感を感じている園も多く、筆者らが園内研修や保育観察等で携わる保育施設においても、日常の保育において保育者だけでは解決することが難しい課題を抱えている。

そこで、こうした課題の解決のための一つの方法として、関東経済産業局官民合同チーム（2022）の課題の解決において支援を受けるための手段や方法を明確に確認することが重要であり、プロセスコンサルティング型の支援が有効との報告にもあるように、保育施設外部のアドバイザーが保育施設に対して伴走者として ICT を活用しながら日常的に保育施設との関わりを持ち、保育者との継続的な対話を通して保育者に寄り添

い、保育者への傾聴と対話を積み重ね、日常的に園の課題を把握して状況に応じた最適な解決のための取り組みを共に考え、支援を行うことができるコンサルテーション（伴走型コンサルティング）が有用であることを実践とともに報告してきた（上村ら、井上ら、音山ら、2022;2023;2024）。

保育 ICT において蓄積された記録は、子どもの成長に関する情報や保護者との協同、子育て支援のデジタルデータとして履歴化され、連続する育ちの場へと繋がられる。これらは様々な分析にも活用でき、科学的根拠に基づいた保育の実践や子育て支援の質を向上させる。本研究において、保育施設への介入研究を進め有効性を検証することは、これまであまり活用されてこなかった保育施設や社会的な子育てにおいて、保育 ICT の利用を拡大させる契機となると考える。

2 目的

こうした一連の研究を背景に 2021 年度研究調査助成においては、①投稿記録システムを活用した保育施設における自発的な園内研修や自律的な学び合いの姿に向けた利活用として、保育 ICT を活用した時間や距離という物理的側面に囚われた従来の研修の概念を大きく変え、一時的かつ短絡的な学びではなく、保育施設にとっての有効的な学びを長期的かつ恒常的に保障する仕組みの構築を目指すこと、②これまで保育 ICT を活用してこなかった保育施設におけるシステムの導入と運用による保育の質向上を目指すとともに、保育 ICT を利用する施設の拡大を図ること、③システムへの保護者の参画に伴う子どもの生活に関わる情報共有と子育て支援としての保護者への専門家によるアドバイスの運用を図り、子どもの成長や発達に関する情報を保護者との協同的な子育て支援のデジタルデータとして履歴化し、保育 ICT を活用した子どもの生活を繋ぐ子育て支援への活用を図ること、④社会資源である行政と学校関係者のシステムへの参加と連携を通じた子育ての社会化を図ることを目指して、保育施設への介入研究を進め、実証的に検証し報告した（上村ら、2023）。これらの保育 ICT の活用を通して得られた成果から示された発展的課題の解決に向けて、前年度研究の内容を継続して研究に取り組んだ。

特に、①では、保育者間での情報共有、システム活用外でのコミュニケーションの増加、保育内容や活動の質的な向上が図られるとともに、専門家が伴走的に関わることで、自律的な学びの姿が育まれる可能性があることが明らかとなった。これは、従来 ICT の活用は関係性の構築や保育の質を保障するものとはなりにくいと言われてきた課題を覆すものであり、保育施設における ICT の導入と適切な活用について示すものであったため、保育施設における伴走型コンサルティングを介入研究により継続的に実践し、その効果について検証した。次に②では、本研究におけるこれまでの研究成果を踏まえて、保育 ICT の導入と活用が可能となり、他施設においても利用をしてみたいという声があげられ始めた。このことから、今後導入を進め継続的に取り組むことにより、その成果と共に更に、これまで保育 ICT を利用していない保育施設においても普及が進むよう、より導入しやすい方法や利用に関わるプログラムについて検証した。そして③では、保育施設と家庭という 2 つの生活の場を行き来する子どもの姿や生活の様子をより具体的に捉え、保育の質の向上を図るために、生活の場を繋ぎ、子どもの生活や姿を共有した。その中で、特に発達の課題を抱える子どもの生活を捉え、一人一人に即した形で支えていくために保育 ICT の活用の効果が高いと保育者からの声が挙げられており、その効果と役割について、対象となる保護者の利用から実証的に検証した。また、④に関して、行政や教育委員会との協議を進め、システムへの参加を試行的に行なうと共に、接続期の保育や教育に関して、連携協力を図った。

本研究では、これらの継続的かつ発展的な課題について検証を進め、その仕組みや課題解決のプロセスについて明らかとすると共に、「保育施設」と「家庭」、「社会資源」をつなぐ保育 ICT を活用した子育ての社会化に向けた連携と協同のための仕組みを検討した。

3 研究の方法

本研究では、「保育施設」と「家庭」、そして「社会資源」を繋ぐための保育記録システムの開発と評価に取り組んできた。また、保育 ICT を活用した子育ての社会化に向けた連携と協同を進めるため、システムを活用した家庭との情報共有と保護者に対する子育て支援の充実を図り、保育者の保育力および保育の質の向上に向けた伴走型コンサルティングによる支援を対象となる協力保育施設へ介入する実証検証によって行った。

協力保育施設は北海道・北東北・南東北の北日本にある保育施設（認定こども園 2 施設、小規模型保育施設 1 施設、幼稚園 1 施設、学童保育施設 2 施設）をフィールドとして検証した。継続的な研究のため、保育施設の都合や状況の変化により、当初の予定から対象となる施設は多少入れ替わることとなったが、2024 年 3 月末時点で、北海道で 2 法人 3 施設（小規模保育施設と学童保育施設）、青森県で 2 法人 2 施設（認定こども園）、宮城県で 1 法人 1 施設（幼稚園）の計 5 法人 6 施設の協力を得て、研究を継続して進めた。各保育施設とも伴走型コンサルティングに基づき、各施設における課題の解決に向けた研修に取り組み、保育者の保育力の向上や保育課題の改善、保育内容の検証に取り組んでいる。

表 1 各保育施設の実施の状況

認定こども園 (2 園)	継続して保育 ICT を活用した伴走型コンサルティングに基づく園内研修を実施している保育施設である。日常的に保育 ICT を活用し、継続的な園内研修に取り組み、自発的なカンファレンスや話し合い、園内研修等が行われている。また、保育実践を保護者に共有することや情報の共有を図ることにも取り組むと共に、子どもを取り巻く社会資源である行政や学校関係者が ICT システムへ参加し、段階的にではあるが、接続期の子どもの教育・保育に関して、公開保育や協議の実践など、連続した繋がりある環境の構築にも取り組んでいる。
小規模型保育施設 (1 園)	これまで園内研修は行ってきたが、保育 ICT の活用は新規に取り組み始めた保育施設である。企業主導型保育施設は、保育所や認定こども園等の保育施設と比較し、受け入れる子どもの生活状況や取り巻く環境、背景等に特別な配慮を有する子どもも多く利用するため、子ども一人ひとりの様子を個別に記録することが園内における保育の質や安全性の配慮へと繋がる可能性が高い。そのため配慮を要する子どもや支援を必要とする子どもの生活の姿を中心として、システムを活用して保護者との情報共有や情報交換に取り組んでいる。
幼稚園 (1 園)	システムを新規に利用し始めた保育施設であり、保育環境や子どもの遊びの様子、保育の内容など、子どもの姿に限らず保育を撮影し、記録することを通して、e ポートフォリオの構築を目指している。まだ活用を始めたばかりであるが、少しずつ研修を重ね、伴走型コンサルティングに基づき、保育を振り返り、検証し、保育の質の向上を目指すため、自発的なカンファレンスや相互の学び合い、園内研修に取り組んでいる。
学童保育施設 (2 園)	保育 ICT の利用を進めて行く中で、保育を可視化し、共有を図りながらドキュメントを作成していくことがなかなか進みにくい状況にあったため、園内研修を構造的に進めることや保育実践を振り返り、その内容について共有し、蓄積するための園内研修に取り組んだことで、保育を撮影・記録し、保育者間で共有することや部分的に保護者へ公開することなどに取り組んでいる。

対象となる協力施設への実地訪問と ICT を活用し、介入による実証検証に取り組んだ。

示された継続的かつ発展的な課題の解決にむけて、研究者が研修・教育プログラムの開発や実践に取り組む伴走型コンサルティングを用いて参与し、保育力と保育の質の向上を目指した。

介入による実証検証においては、倫理的配慮として、事前に施設長及び管理職への研究の説明を行っており、承諾を得て行っている。また、園内研修等の実施にあたっては、伴走型コンサルティングに基づき、何度も対象施設との打ち合わせを行いながら進めている。

本研究における研究のテーマは以下の 4 点である。

- ①開発した記録投稿システムを活用した保育施設における自発的な園内研修や自律的な学びの姿に向けた利活用のため、伴走型コンサルティングに基づく保育者の自律的な学び合いの生成のプロセスと効果についての検証。
- ②これまで保育 ICT を活用していなかった保育施設（学童保育施設を含む）への利用に向けた導入支援とサポートとして、各施設における導入に向けた施設整備や保育者（指導員）の利用に向けた課題の明確化と段階的な教育（支援）プログラムの構築。
- ③システムへの保護者の参画による子どもの生活に関わる情報共有と子育て支援としての保護者への専門家によるアドバイスの運用、特に生活の課題を抱える子どもへの個別的な支援と投稿に際しての情報セキュリティに関するシステムの検討及び開発。
- ④開発した投稿記録システムへの行政と学校関係者の参加に向けた連携の検討、段階的に行政関係の参与から進め、保育 ICT を通して行われる社会資源との繋がり、および情報共有により期待される成果と効果についての検証。

これらの研究内容について、以下では、システムの安定化と再開発の取り組みと、システムを活用した伴走型コンサルティングの実践と介入研究、そして得られたデータから効果について検証し、報告する。

4 保育記録システムの安定化と開発

システムでは、様々な ICT 機器の活用により保育シーンを撮影し、それを基にテキストを添えて、園それぞれの独立した web 上のサイトに投稿記事を作成して投稿する。

これらは、それぞれの保育施設において、ID と PW を与えられ許可された者だけが見ることができる。そして同時に、投稿されたシーンに対して、コメントやアドバイスを送ることができ、これらはリプライとして積み重ねられ、タグにより振り返ることが可能であり、子どもの変化を捉える e ポートフォリオとしての役割も担うことができる。こうした基本となる設計は、先行研究において、開発し実装してきた。しかし、介入研究による実践を進めていく中で、システムの投稿に際して、一部エラーや不具合が発生するケースが確認されたため、本研究において修正すると共に、新たな機能の開発に取り組んだ。

修正・開発した内容は以下の通りである。

様々な ICT 機器により撮影された画像や動画が、アップロードされる上で、特定の機種や OS によりうまく表示されないことがあったり、サイズや容量、通信環境によっては適切に表示されない不具合が発生したため、スマホやタブレット、デジカメ等で撮影したものがエラーなくアップロード出来るように、様々な機器で撮影した画像や動画で条件を変えて、フィードバックを図り、システムの安定化を図った。また、投稿に際してこれまで以上に、より安全に個人情報の保護を図ることが可能となるよう、新たに写真投稿のアラートに関する機能の開発と撮影された個人の自動的な認識の機能の開発にも取り組んだ。

本研究のシステムにおいては、保育者がシーンを投稿する際に、保護者との共有を許可した場合に限るが、当該シーンに関わる子どもの保護者に対してその投稿を共有するための機能が組み込まれている。これまで投稿にあたっては、対象となる児童のみが写っている写真をアップロードするために、保育者は一人ずつを確認しながら人為的なミスが起きないように注意しながら共有しているが、万が一の間違えがないようにするためのサポートとして、複数人の映り込みの防止や人間違いが起きないようにするためのシステム上でのチェックが入るようにしてほしいとの要望があった。

そのため本研究において、段階的にシステムの開発に取り組んだ。まずは、写真投稿に関するアラート機能として、投稿する画像に複数人の写真が写っている場合、「複数人が写っている可能性があること」の注意文を出すようにした。注意文が出ることで、投稿者が写真について再度確認することとなり、安全性が高められる。その後、シーンの投稿の際に、自動的に子どもの特定がされるようにしたいとのことから、撮影された児童を認識し、特定するための機能も組みこみ、より安全に共有を図ることが出来るように配慮した。ただし、後者の顔認識の機能は個人を正確に特定して完全に認識することがまだ十分とはいえない段階であり、現在もフィードバックを重ね、認識の精度を高めるための修正を行っている。

5 伴走型コンサルティングの効果

本研究では、令和 6 年 1 月から 3 月の期間において、各施設の管理職（施設長及び主任、リーダー等）合計 12 名に対して、伴走型コンサルティングに関する非構造型のインタビューを行った。

外部の専門家が定期的かつ継続的にに関わり、保育施設における課題の解決に向けて伴走的に支援したり、アドバイスや園内研修が行われる伴走型コンサルティングについて、その効果や成果としてどのように考えているかということについて問いかけたところ、「開始前と比べて、自分の保育をよく振り返るようになった」「ミーティングやカンファレンスの際に、少しずつ参加している全員が意見や考えを発信するようになってきている」「今までも保育者間でよく話をしていたが、保育に関しての話や子どもに関しての見立てなどをこれまで以上に話をするようになった」「保育者同士での話し合いの様子や互いに保育を講評し合う様子が見られている」「先程の出来事や場面について、そのままにしようとせずに、話し合ったり、相談したりしながら、まずは考えてみようとするが増えてきている」「他の先生の保育の様子に気づいて、教えてもらったり、一緒にしてみようと誘いあうようになった」「次にこんなことを聞いてみよう、こういったことを相談してみようと思うようになり、自分の園のことをよく見てみることやいろいろな出来事に気づこうとするようになった」「いつでも質問や相談をしようと思ったときにすることが出来るというのは安心感が大きい」「研修を通して保育場面を可視化していくことの必要性を学ぶことができ、シーンを公開し共有することが、保育を振り返ることに繋がることに気づくことができた」「子どもの遊びこむ様子や真剣に取り組む様子を見かけた際に、今この子が成長している瞬間としてるようになった」などの回答が示された。

これらのことから、保育を日常的に振り返ることや話し合うことが増えていること、自分たちの保育に関して考える姿が表れていること、そして、外部の専門家を相談できる相手として受け入れていることがわかった。各保育施設によって、保育 ICT の利用や活用には差があり、専門家が参与するタイミングやこれまで関わってきた期間なども異なるため、一律のものとして捉えることはできないが、全ての園において、効果に対して好意的な回答が示された。また、これからも継続したいと考えているかと問いかけたところ、全ての回答者が、継続していきたいと回答しており、これからも継続して保育 ICT を活用した日常的な保育への理解があった上で、継続的に園へ専門家が関わることを肯定的に捉えていることが示された。

そして、インタビューを通して示された回答から、これまでの保育 ICT に関わる研究の中で継続的に保育 ICT を活用し、伴走型コンサルティングを継続して実践している園（認定こども園）の回答が、伴走型コンサルティングの効果に関して特徴的に示されていた。

例えば、「写真を撮影したり、子どもの姿を記録することが日常の当たり前になってきている。もっと知らせたいし、見てほしいと思うときが多い」「子どもの遊ぶ場面や生活する姿を見た際に、この瞬間をみんなに見てほしい、伝えたい、話をしたいと思うようになっていて、写真におさめることが出来なかったりすると、もったいないと思うことも出てきた」「自分たちの保育を振り返ったり、話し合ったりするときの視点や目が、細かく丁寧に、厳しくなったように思う」「保育環境についてアドバイスや意見をもらっても以前だと一時的には変わってもまた崩れてしまうことがあったが、今はその状態がまずは保たれるように、そして自分たちで子どもの姿に応じて変化させ、子どもが触れることを通して更に変化させていけるようにと考えるようになった。こんな形に変わったよということを、専門家に見てほしいと思っている」「環境に関して、自分たちで気づくようになってきた。以前に〇〇でアドバイスもらったのだから、こちらも〇〇のようにしてはどうだろう、ここは変えないと、あそこも気をつけて見るようにしていった方が良いということを同僚と話をするようになり、自分たちで気づく様になってきたと思う」「子どもが遊ぶ際に、見守ることや遊びを継続して行えるように保持することも考えるようになった。子どもが熱中して遊ぶことをもっと熱中できるようにもっと楽しめるようにを考えるようになった」「うまくいかないことや思ったとおりにならないことも多いけれど、子どもの様子をみて気付いたことがあれば、見守ってみよう、動いてみよう、関わってみようと思うようになった」「子どもの今の姿と同時に、この後どうなるかを予測して見守るようになった」「今の場面を見た際に、以前はどうだったか、この前はどうかだったか、さっきはどうだったかと時系列での姿を考えて追うようになった」「来年はどうなるかな、小学校にいったらどうなるかなと長い期間で子ども成長を考えている瞬間が多くなった」「子どもにかけける言葉が、注意をしたり、声を大きく出すようなこと、指示的な言葉がほぼ無くなったように思う」など回答されていた。

これらのインタビューを通して、保育 ICT を活用した伴走型コンサルティングは、保育者の保育に携わる姿勢や態度、意欲などを高めるために寄与すると共に、日々の保育の振り返りと継続的な学びを通して、保育者の保育力や保育の質はより高い物へとなっていきやすいことが示されたと考える。

6 保育 ICT 活用の促進

これまで保育 ICT の利用を行っていなかった施設では、介入研究において、シーンの投稿に関しての難しさを示す意見が示されていた。保育場면을振り返り、共有し、蓄積していくことを進めていきたいと考えており、実践しようとしているが、場면을撮影し、保育を可視化して共有していくことが、なかなか難しく、進んでいきにくいとのことであった。保育場면을撮影するのは、行事などの特別な機会や場面が多く、日常的な保育場면을可視化することで振り返り検証する経験が少ないことや写真に対してテキストを記載する際に「〇〇がありました」「〇〇をしました」という報告としてのテキストが多くなってしまうため、シーン投稿に対して余計に難しさを感じていることが示された。

このことから、本研究では、シーン投稿を促すためのプログラムを検討した。

プログラムの検討においては、シーン投稿が日常的に行われている研究協力園のインタビューにおいて示された「園内研修を通して写真のとり方が変わった。子どもの日常の遊びこむ姿や特別な写真とならないように、子どもの実際のそのままの姿を意識をして表出するように心がけたため、投稿する視点が子どもの特別な出来事の紹介や共有ではなくて、日常の子どもの姿の共有に意識的に変わってきた」ということに注目した。新規に始めた施設におけるこれまでに撮影された写真について確認すると、子どもが正面を向いてピースをしていたりポーズをとっている写真や集合写真のように複数人がカメラに向けて微笑んだり、ポーズを

取ったりしている写真が多かった。またテキストも上述の通り、場面や活動の内容を説明するものが多く、楽しかった、面白かった、喜んでいたなどの感想を示すものが多いことがわかった。

一方日常的にシーン投稿が行われている保育施設の投稿に関して、2022年4月から順に投稿された30件のシーンと2023年9月の投稿を比較した結果、2022年4月では80枚の写真に対し、子どもが正面を向いてカメラに対して顔を向けている写真は25枚(31.3%)であり、30シーン中15シーン(50.0%)であった。そして、2023年9月において投稿された30件のシーンでは79枚の写真に対して、子どもが正面を向いてカメラに対して顔を向けている写真は8枚(10.1%)であり、30シーン中8シーン(26.7%)であった。子どもが正面を向いた記念撮影的な要素としての写真から、子どもの横顔や後ろ姿も含めた、その場面における子どものあるがままの自然な姿が日常的な選択へと大きく変更されていることがわかった。このことから、保育場面の撮影において、子どもの記念撮影のような姿ではなく、構えない子どものそのままの姿を撮影し、それに係る保育者の見立てについて示すことが、シーンの投稿を日常的な保育の振り返りの手段として選択されるようになることがその可能性として示されていると考える。併せて、2024年1月から3月までの期間において示された91枚の写真は、子どもが正面を向いてカメラに対して顔を向けている写真は6枚(7%)であり、30シーン中5シーン(16.7%)であり、更にそのような子どもが正面を向いて構えているシーンの投稿がさらに減少し、遊びこむ子どもの姿が示される割合が増えていることがわかった。

日常の子どもの姿を捉えることで、子どもの内面を予測し、その興味や関心、思いなどを読み解こうとする姿勢が生まれ、シーンの投稿が日常の保育の中に落とし込まれていると考えられる。

これらのことから、園内研修において、子どもが正面を向いて映る場面と子どもの遊びこむ姿のままの姿を比較した対象理解に関わる研修とフォトカンファレンスを繰り返して行った。どちらが保育者としての見立てを書きやすいか、活動そのものを示すものではなく、子どもの姿とともに、保育者の捉え方や見方を示すことが出来るか、ワークを通して検討した結果、子どもの遊び込む様子や生活する姿そのままを示した方が、見立てを示しやすく、時間経過に伴う変化を捉えやすいことが保育者から示された。このことにより、保育場面の撮影における子どもの姿の捉えが大きく変化することとなり、まだまだ大きな変化ではないが、子どもの姿や遊びの様子についてありのままの写真撮影し、保育者としての見立てを示すことが増えてきており、保育施設における保育場面の共有化が進み、現在も進められている。

7 子育ての社会化

7-1 保護者との繋がり

子どもの育ちの共有と子育て支援について、保育ICTを活用して取り組むことは、保護者の子育てに関する不安や難しさを支える一つのツールになる。保育施設における子どもの姿や生活の様子である保育の場面を保護者と共有し、保育者の専門職としての保育のねらいや意図、保育者の配慮等を伝え、子どもの発達を共有することは、保護者と共に子どもの育ちを見守ることとなり、保育を公開することで保育の質の保障や安全性の担保へとつながるものとなる。保育者へのインタビューを通して、保護者と保育場面を共有することでの効果として、保護者との日常的な会話が広がりやすいことが示された。登園時や降園時など、普段保護者と言葉では話をしている場面を十分に具体的に伝えきることができない時も、実際の子どもの姿をwebを介して保護者が確認することを通して保護者から保育場面について、適切な理解を得ることが出来ると同時に、保育者と保護者が話し合う機会がこれまでよりも日常的な場面において増えたことが示された。

また、障害を抱えたり、配慮を必要とする子どもへの関わりにおいてもシステムでの共有を通して、家庭と園との生活の姿を共有することが可能となり、具体的な子どもの姿を通して、保護者との連携が図りやすく、意思の疎通が丁寧に行われていた。

発達の課題を抱える子どもや生活での支援を要する子ども、療育を必要とする子ども、疾病での支援を必要とする子どもなど、システムを介した家庭と保護者との情報共有が行われていた。積み重ねられたケースとして、保育活動の場面において、日常的に眠たさを表す園児がおり、保育者はその時々において、お昼寝等の場所を確保したり、子どもにとって最適な保育の形態を保育者は検討しながら、言葉がけや支援を行っていた。しかし、眠たい様子が解消されることはなく、朝の登園時から日常的に眠たい様子であり、自由遊びや室内あそびの場面でも、床で眠ってしまうことや壁にもたれながら眠ってしまうこと、眠そうにしながら大きく船を漕ぐような様子を表すことが多く継続的にある状況であった。こうした子どもの状況について口頭で保護者へお伝えをしていたが、保護者から具体的なその場面について知りたいとの申し出があったこと

から、映像や画像を通して保護者との共有を図った。これにより言葉では十分に伝える事ができていなかった子どもの様子について、園と家庭において共有が図られることとなり、システムを介しながら、日常的な子どもの生活の状況について。園においての姿だけではなく、家庭における子ども様子に関しても情報共有が図られることとなり、保護者からも毎日の登園時に睡眠時間や食事の状況など、生活の様子が丁寧に伝えられるようになった共に、気付いたことや気になったことなどを保育者へ伝える様子が見られた。専門家からのアドバイスも行われながら、日々の生活状況について、家庭と園において情報共有が図られ、子どもの生活への支援を相互に意見を重ねて支援を検討したことで、少しずつではあるが、子どもの園での生活が改善され始め、遊びの場面への参加や活動への参加が以前よりも見られるようになった。

2つの生活の場における子どもの姿が共有され、保育者が子どもに対して関わる際の配慮や思いを保護者がこれまで以上に気づくようになると同時に、子どもの姿を介して、保育者と保護者の会話や関わりが増えることとなり、協同的な関係性が強化されたことが示された。

7-2 社会資源との繋がり

先行研究では、子どもを取り巻く環境の社会資源である小学校や行政との連携を目指し、試行的にシステムへ参加し、保育現場における子どもの日常的な生活する姿について、可能な限り共有を図ろうとしてきた。本研究では、子どもを取り巻く環境として、保育施設と接続する場所、日常生活を支える場所として、子どもを取り巻く環境の社会資源である行政や学校において、保育での子どもの姿や生活の様子を日常的に共有し、子どもの連続した育ちを捉えて、繋がりある教育や援助を進めていくために、施設間での連携を子どもの姿の共有や相互の連携を目指して、保育 ICT を活用したシーンの投稿に関して継続して取り組み、共有を図った。その結果、まだ十分緊密にということは難しいが、保育シーンの投稿に対して、コメントやリプライが行われ、画像を通しての情報の共有に留まらず、小学校以降の子どもの育ちと繋がる視点でのコメントも行われている。そして、保育施設における接続期（幼保こ小連携）に関わる公開保育やシンポジウムも行われるとともに、かけはしプロジェクトとして、つながりある教育プログラムの開発に関しても保育施設と小学校が連携し、行政が関わる形で進められ始めている。

こうした連携の仕組みと体制が少しずつ構築されていく中で、小学校教員や指導主事に行ったインタビューにおいて、投稿されたシーンを共有することを通して、保育施設において子どもに関わる保育者が子どもの育ちにおいて抱いている視点や関わりにおいて大切にしていること、子どもに育みたいと考えている力など、小学校以降の教師との視座の違いや子どもに対する見立ての異同について理解が深まったことや、小学校以降の教育の土台や基礎を形作るものとして、幼児期の遊びを通した学びが活かされ繋がっており、こうした教育内容について保育施設と小学校が共に学びあう機会を構築していくこと、子どもに関する情報を具体的な子どもの姿や遊びの場面を通して共有することで子ども一人一人の特徴や育ちについて知るとともにそれぞれの子ども良さを捉えることに繋がることの理解が深まり、今後への期待が示された。

近年、接続期の教育やかけはしなど、保育施設と小学校をつなぐ学びの体制づくりに関して、教育における課題として多くの自治体において取り組みが始められているが、システムを介し、日常的に子どもの姿を共有し、蓄積された幼児期の子どもの育ちの繋がりを共有することが可能となるように、継続して研究を進めていきたい。

【参考文献】

- E. H. シャイン(2017) 謙虚なコンサルティング クライアントにとって本当の支援とは何か、英治出版
- R. ハイフェッツ(2018) 最前線のリーダーシップ 何が生死を分けるのか、英治出版
- 井上孝之・上村裕樹・音山若穂(2020) 保育の質向上と保育者の負担軽減のための保育 ICT の活用と展望, 日本保育学会第 73 回大会発表論文集 P-A-9-14.
- 井上孝之・上村裕樹・音山若穂(2021) 保育の質向上と保育者の負担軽減のための保育 ICT の活用と展望(2), 日本保育学会第 74 回大会発表論文集 P-B-9-11.
- 井上孝之・上村裕樹・音山若穂(2022) ICT による伴走型コンサルティング(2) 保育研修における課題, 日本保育学会第 75 回大会発表論文集 P-C-1-08.
- 井上孝之・上村裕樹・音山若穂(2023) ICT による伴走型コンサルティング(4) 保育研修における伴走者の介入, 日本保育学会第 76 回大会発表論文集 P-C-11-09.
- 井上孝之・上村裕樹(2024) ICT による伴走型コンサルティング(5) システムを活用した情報共有の場づくり,

日本保育学会 77 回大会発表論文集 P-D-10-05.

井上孝之・上村裕樹・音山若穂・佐々木淳(2021)保育 pedia によるキャリア支援の一展望, 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 23, 39-48.

井上孝之・田頭初美・松本亮太・上村裕樹・伊藤悟・音山若穂(2021)保育の質向上のための ICT の活用, 日本保育学会第 74 回大会自主企画シンポジウム, J-A-7.

岩田恵子・大豆生田啓友(2018)保育の可視化へのプロセス, 玉川大学学術研究所紀要, 24, 1-13.

上村裕樹・音山若穂・井上孝之(2020)保育の質の向上に向けた ICT の活用(1)—活用の可能性の検討にむけて—, 日本保育学会第 73 回大会発表論文集, P-A-9-11.

上村裕樹・音山若穂・井上孝之(2021)保育の質の向上に向けた ICT の活用(3)—活用事例と課題—, 日本保育学会第 74 回大会発表論文集, P-B-9-9.

上村裕樹・音山若穂・井上孝之(2022) ICT による伴走型コンサルティング(1)—保育研修への活用可能性—, 日本保育学会第 75 回大会発表論文集, P-C-1-07.

上村裕樹・音山若穂・井上孝之(2023) ICT による伴走型コンサルティング(3)—継続的な研修による保育者の意識変化—, 日本保育学会第 76 回大会発表論文集, P-C-11-08.

上村裕樹・井上孝之(2024) ICT による伴走型コンサルティング(6)—課題解決にむけた支援—, 日本保育学会第 77 回大会発表論文集, P-D-10-06.

上村裕樹・音山若穂・井上孝之・佐々木淳(2021)保育 ICT を活用した保育の質の向上に向けた取り組み, 聖和学園短期大学紀要, 58, 95-105.

上村裕樹・音山若穂・井上孝之・佐々木淳(2022)保育の質向上に向けた ICT を活用した保育者の学び, 聖和学園短期大学紀要, 59, 149-159.

上村裕樹・井上孝之・音山若穂・阿部好恵(2023) ICT を活用した伴走型コンサルティングの可能性, 帯広大谷短期大学紀要 60, 9-17.

上村裕樹・井上孝之・音山若穂・阿部好恵(2024) ICT を活用した伴走型コンサルティングの可能性 2), 帯広大谷短期大学紀要 61, 1-10.

音山若穂・上村裕樹・井上孝之(2020)保育の質の向上に向けた ICT の活用(2)—園内研修における活用可能性の一検討—, 日本保育学会第 73 回大会発表論文集, P-A-9-12.

音山若穂・上村裕樹・井上孝之(2021)保育の質の向上に向けた ICT の活用(4)—公立幼稚園における実践報告—, 日本保育学会第 74 回大会発表論文集, P-B-9-10.

音山若穂・上村裕樹・井上孝之(2022)保育の質の向上に向けた ICT の活用(5)—園内研修における伴走型コンサルティングの可能性—, 日本保育学会第 75 回大会発表論文集, P-D-6-06.

音山若穂・利根川智子・三浦主博(2015)教育・保育における対話型アプローチ;現状と課題, 群馬大学教育実践研究, 32, 227-237.

関東経済産業局地域企業支援室(2020)「官民合同による伴走型支援」

関東経済産業局官民合同チーム(2021)「地域中核企業を対象とした官民合同チームによる伴走型支援の取り組み」厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知(保育所等における業務効率化推進事業の実施について(雇児発 70203 第 3 号)) .

〈発 表 資 料〉

題 名	掲載誌・学会名等	発表年月
ICT を活用した伴走型コンサルティングの可能性 2)	帯広大谷短期大学紀要(61)	2024 年 3 月
ICT による伴走型コンサルティング(5)システムを活用した情報共有の場づくり	日本保育学会第 77 回研究大会	2024 年 5 月
ICT による伴走型コンサルティング(6)—課題解決にむけた支援—	日本保育学会第 77 回研究大会	2024 年 5 月